

弘化元年
九月
晴

特 別
^5
6590
60





句合 尊正源庵 新集選

以河一終あり 古来下

夕月小舟渡あり 船係り

東のまを牛乳の乳を

梅と友とを愛する人の杖
字
この杖を愛する人の杖
またの還る杖を愛する人

浅稲ふや部のそや成を成

明くあふ耳同きし一歩如く
 勝つる多かるふをうりぬ
 う持て立上。礼のさる佐
 りしやも我々との枝

うきと氷をま 松風

ほろろとやうらのや氷をのり

うきとやうらのや氷をのり

うきとやうらのや氷をのり

うきとやうらのや氷をのり

うきとやうらのや氷をのり

うきとやうらのや氷をのり

うきとやうらのや氷をのり

うきとやうらのや氷をのり

うきとやうらのや氷をのり

うきとやうらのや氷をのり

うきとやうらのや氷をのり

ツヤクニ

字
體
一
海
體
一
や
高
の
月

楼西樓の柿を喰ふ

ふりふり

子何如

字
多
此
毒
也
何
の
え
ろ
い
係

古香通氣

私に帝のまゝに書せしむ
とて

大に
如字を以て

休るはそとや悲いのも
難

井中、一、此、行、集、の、入、り

ゆきちしなうもあし
あまの情

きつ

しつゝのちよふのちよふ
はちよふのちよふのちよふ

のりき

のりきよききりやむい

未だ

川あゆみかゆいふのま

かききききき

そのかきききや山のま

下かきききききき

そのかききききき

かききききき

月かきききき

かききききき

かききききき

かききききき

かききききき

かききききき

花をみんとおれにまてしうら
かふりふあかししねのふ
ねのねむいあけぬ花の香
をみんとおれにまてしうら
山吹や花をみてもうらよ
にそりて桂の香やその香

花をみんとおれにまてしうら
かふりふあかししねのふ
ねのねむいあけぬ花の香
をみんとおれにまてしうら
山吹や花をみてもうらよ
にそりて桂の香やその香

子
 愚者
 子
 此の山ゆゑなり
 なるまゝ
 橋たりか

力成王直
通子原
勤
書

木の皮を剥き
 木を焼く

子
 我ち様もの君しよをうまづうてと
 書をえうととにむさうといふて
 ちのともありあつたやあなむ

乙未之陽春瑞雲

は
あや衣ふくめ水佛

節々特也
 修成後より
 其後修成より
 其後修成より

まけやのりりの高き座もえきま

こいひのりり
が将様侍入をせりま

けいひ

みちをききしりや **楽**

ありふた系候きりり

ま
けいりり様をきりや

きりりきりり
きりり

みけやきりり

きりりきりり

きりりきりり

きりりきりり

村おのりり

きりりきりり

目赤如腫一石代孔急田村志

七
八
九
十

考
美月
痛
志局
秋字入

析
口
力
夕
夕

新刻耳を渡ひ河 名の付
 へん 名ふらふ 名ふらふ
 姓や 姓のふらふ

ワカヲケ
るれそ^上出^下に^上新^下や^上明^下新^下
其^上同^下根^上北^下新^上山^下の^上山^下や^上む^下新^上家^下
其^上待^下中^上方^下双^上路^下高^上下^下云^上
初^上一^下け^上一^下や^上又^下云^上其^下接^上新^下が^上
又^上新^下い^上二^下ら^上云^下く^上細^下係^上し^下な^上

九月一日田村山あり

其^上也^下同^上も^下云^上ら^下と^上ま^下い^上山^下の^上云^下

一^上事^下一^上人^下の^上云^下云^上一^下は^上云^下す^上
と^上記^下の^上新^下の^上作^下と^上云^下や^上其^下の^上月^下

● けやふ屋敷のふかきやうな
十夜ものまじけらしん魂をさす
石ち君より父のめをさるる
さのさるのさるるるる現の柳
あ解君さふの神さふし
柳をさるる痛ふさのさるる
か

○

さるるさるるさるるはせあの日
秋のやうな風をさるるさるる
さるるさるるさるるさるる
さるるさるるさるるさるる
さるるさるるさるるさるる
さるるさるるさるるさるる

八月八日松崎山月を望

二更

余形の松の枝や秋の月

半葉の味もたは

張の細い葉も秋の味

事持てあは鳥のおうた

い川のさかや西山のさうく

松二

松崎

松崎

松英

静なり松の葉のさか

神の足元は秋の味

ささやきと松の味

天宮の松の葉の味

子孫の松の葉の味

松の葉の味もたは

思ひの松の葉の味

松二

松崎

松崎

松英

松二

松崎

松英

一とやもきら月女柳うつさ
様々解きよきくく解り水
刺力いふぬ程うる元とをえ
きうもつしふ通のあしれ
紅のをを食てすあもし
きううぬつておふはせ
徒げとを候ふ候ハ親衆
二 英 一 英 一 英 二

はううさんふ口り 五
人室の障のうう候ふあはれ
あうちこの地ハ猿さけぬ
ういすれふあれ顔笑て
まさいや右の障むえを常
りくききうの影のほめり
引けり 顔を待たぬ
一 英 一 英 一 英 二

あゝおふもわんとならぬ
あゝのまをさう坊
行儀の新と出さしめ
さうさうさうの一
お代もせよはなをあら
思ひぬの油りー
あゝ

[illegible]

ふかき海の水

海も自由な水はくはるくはる

ふたつめくはるくはるの海

。海も自由な水はくはるくはる

ふたつめくはるくはる

。海も自由な水はくはるくはる

。海も自由な水はくはるくはる

。海も自由な水はくはるくはる

申す自由な水は

海も自由な水はくはるくはる

。海も自由な水はくはるくはる

。海も自由な水はくはるくはる

。海も自由な水はくはるくはる

。海も自由な水はくはるくはる

四村亭集
山秋亭
字入
新字
入
合
十
少

山
まゝのうらりしや　よき時あり
書
松乃雲おとまり　あけふも
時ぬきうのむね^上に本やる程
さかえりしや　おれ
小綴り　はなみづのまろく、浦のわが水

今
地之在や、
山
生るる方也。
山
時、
山

いしすた
月とてさあやさうな
まふの花もさうのどんけり

山田さ丹子よみ端めて
兄姉—うのやうにわちうの
今—さういふ三つのおまが

かりうら京紙をききり
月きれ—まけりやうの
うし神保子—まのまのま
正
月敵

はう—うのけうのけう
—けり—まをききり
う—まのまのま
はう—まのまのま
ほ—まのまのま
若—まのまのま
杜栄

川 杉の渡りもかじりぬ
何處へ行くも月影のれ
やーとさあ海にのりて
あかふきもいそがし
船子の帆ふきのやうに
千々喊きふきもあはれ
松

杉のほろりといふ
うきうきと橋あし
舟のむきけのうき
きんぐもぬきぬき
ぬきぬきといふ
矢合も橋あしといふ
松

第目の浪も和らぐのちの月
 多きおん程あるは他傳
 多し増しは多の月の聲なるは
 多しと他もありと方東葉
 多しは多のせきりよと云とる
 心をなやめぬとありは

右種あり

好のあふふきしや枝の雨ふふふ
 り枝やうふふふふふふふふふ
 枝の雨ふふふふふふふふふ
 枝の雨ふふふふふふふふふ
 枝の雨ふふふふふふふふふ

西行を杖で巻く

○ちのりいさし びんごのやうな松

○松のうしろ 松のうしろ 西行

かきや 田村云

○松のうしろ 松のうしろ

松のうしろ 松のうしろ

西行のうしろ

松のうしろ 松のうしろ

松のうしろ 松のうしろ

松のうしろ 松のうしろ

松のうしろ 松のうしろ

松のうしろ 松のうしろ

うゝあゝ下ゝとて奥なり

靖 魂

まゝのけけそり ちんれ

おゝ山ちんれん

山にやちんれん

ちんれんめ

おゝちんれん

ちんれん

早

おゝちんれん

おゝちんれん

おゝちんれん

おゝちんれん

おゝちんれん

卯の辰月うしひめ也なりあらし

雲くもたる雲くものうきたぬくして

○大おほきの新あらたしき一いつ番ばんのしりん一いつ完かん

流ながるの水みづとて

流ながるの水みづとてのなまをかかして

ああららしきとしる連中ちゆうとて

ははららしきとて雲くもとて結むすぶん

かかららしきとて雲くもとて結むすぶん

借か佛ふつとてぬん

かかららしきとて雲くもとて結むすぶん

ええれれとて雲くもとて結むすぶん

流ながるの水みづとて

かかららしきとて雲くもとて結むすぶん

ううちちとて雲くもとて結むすぶん

周
作
の
海
を

海桑

集賢堂

山ノ東に
鳥のすゝめ

吹浦

為

乃

子まのそを吹く
 陰まゝむら
 云々のむら
 雲のむら

信山より玉の河に
云々の玉の河に

浮城を去りて又入

吾
姓
李
氏
子

字
○斤
切の作れぬをう

口りそつふハ、
 くらやふをあらめて
 くらやふをあらめて
 くらやふをあらめて

○二のきふうあはさう部
部をさけのきお桂うい
二あてはさのふやほきん
時き桂ねおきあめ桂うい
桂ういあてい桂う
桂うをほりあうーあきん
○あて桂うあきんを桂うい
桂ういあてい桂う

二部のきふうとあて

○あてー桂うあてあて

○あてーあていあてい桂う

あてのあて

○あてーあていあてい桂う

ははし
米のやき場を圓路
ちの子周防の玉や杜坊
師さこそとらの風を
ききしと杖を曳いて

家移の清き風ゆきやな

遠方やふのふむきふねのるる
きききききききききききき
うらふやきききききききき
浦のきききききききききき
山の井

空を飛ぶ鳥の如く
 水に沈む魚の如く
 雲に散る花の如く
 風に舞う葉の如く
 月を照らす星の如く
 空を渡る鳥の如く
 水に沈む魚の如く
 雲に散る花の如く
 風に舞う葉の如く
 月を照らす星の如く

風竹隱居

三つの中へ
 一つは中へ
 一つは中へ
 一つは中へ

よりちしつりて

ねこ

さるものもさるやうのほどもあ
ふまのふまうとさるものもあふま
むと後のさるふさのさるものもあふま
はるものもあふまのさるものもあふま
さるものもあふまのさるものもあふま
さるものもあふまのさるものもあふま

さるものもあふまのさるものもあふま
さるものもあふまのさるものもあふま
さるものもあふまのさるものもあふま
さるものもあふまのさるものもあふま
さるものもあふまのさるものもあふま
さるものもあふまのさるものもあふま

千羽経をきくけし巻
改を改めんと書き場の
このひらいて

長原

海老の子の多しある人々和意
きりあまの日の思ひに 都 荒
なすれは儀の緒解きありて 費三

移探子の歌も遠く
侍やふきしをとりしは相
初織の上り 給きり
相う枝の角 吹風うあ
奇 怪ふけり 舞 告
まをその身の渡りすこ退る
月 屋 松 芥 松 地
月 意 水 上 伯 代

己のなまひのやうなすみ
白めしものほろ山崎
有海をくもきの 丑井

右短ふり

第1月の波らふよりや
又料の月けにる 氷く柳竹記

清土の焚火新し細し
おもしろく こそ尻

常あふやみもたねの松の門
そのまのまをを 老の煙を 松二
清神楽にいけ 夢を無小掃 甲信

右うね

このまゝいのうゝあま

まぬふるの波の所中塔山

あふるまゝのまゝあま

右經より

まゝ月ほる波山子

まゝ波を訪ふたぢをわらふ新

まゝの風は満ちぬ力ゝ那

波の神はくまの杖端山

あふるまゝのまゝあま

まゝ料のまゝ波をうらう

うらうまゝあまをうらう

まゝまゝのまゝあま

、山

ひろくやほろと髪を剃る山

後拭いひきりさ川をう

志川といと物めわのこね山

まゝゝゝ山辛味松

ささき山松の川ささき山

涙を山一山山山山

一掃の山ふこ山山山山

山山山山山山山山

山山山山山山山山

山山山山山山山山

山山山山山山山山

山山山山山山山山

信城の江戸を越え角のとし山

浪よりあまの五丈力

世ある一ふれあれと縁とるを

むせう〜恨まれぬ秘の空

世あるむの危〜とる留の夢

半ハ空つ壁〜うけ

市に在船の橋〜方そ、城もせん

船〜とるを思はれ外

又改〜信子とる水〜おもひ

素〜信子とる水〜おもひ

片城の月をいさのうけ

わ〜の〜の〜の〜の〜

あふ二と

そよのあふつらうつや雨の時
早殿の天手成并くま風か

横月のもゝのた

一君と人衆のまゝ
巡ねしりよとるを

あふのあふのあふの
あふのあふのあふの

あふのあふのあふの

あふのあふのあふの

あふのあふのあふの

あふのあふのあふの

あふのあふのあふの

うきをねるをね
やうきやふねのけさ
ねたねたその片
をきし
をいふく柳やそよ風
うきの花うきをねる
うきをねる

うきをねるのねる

寺

やうきやふねのけさ
うきをねるのねる

川廻のさくら山崎のうら
月代うらけり春うらけり
やうに花さくうらけり
春を待つうらけり
うらけり

小橋のうらけり
林のうらけり
市振のうらけり
舌をうらけり
地をうらけり
うらけり

對会 金谷舟子 柳葉 舞渡 撰
考 松風 音字 入 折 こわ こと 万 元

そ 五鼓 ぬの 蘭と 城や ても 影に
川 喰や 鰻と 止て 花う 老
あ の 朝の 油を 花り 花う 邪

何 つても ちあ の 上や 花を せん
時 くる 水ゆ りお きて けう なる
二 月や けう なる 花う けう

○

さき ちや おひ 花の ちう ちし
一 ちあ けう けう けう けう けう

持てゆくふちうり玉ふち
持はれしはあつちふちうれ
持て入るふちうれぬのち

是れは持てあつちうれぬ
すのちうれぬのちうれぬ

えんき

おちやうれぬのちうれぬ

きんきやあつちうれぬ

——にきんきあつちうれぬ
きんきやあつちうれぬ

えんき

きんきやあつちうれぬ
きんきやあつちうれぬ
きんきやあつちうれぬ
きんきやあつちうれぬ

ア、イ、ウ、エ、オ。ハ、ヒ、フ、ヘ、ホ。
カ、キ、ク、ケ、コ。サ、シ、ス、セ、ソ。マ、ミ、ム、メ、モ。
ヤ、ユ、ヨ。ラ、リ、ル。ニ、ヌ、フ、フ、ヘ、オ。
タ、チ、ツ、テ、ト。ウ、リ、ル。シ、ロ。
ハ、ヒ、フ、ヘ、ホ。ニ、ヌ、フ、フ、ヘ、オ。
ハ、ヒ、フ、ヘ、ホ。ニ、ヌ、フ、フ、ヘ、オ。
ハ、ヒ、フ、ヘ、ホ。ニ、ヌ、フ、フ、ヘ、オ。

